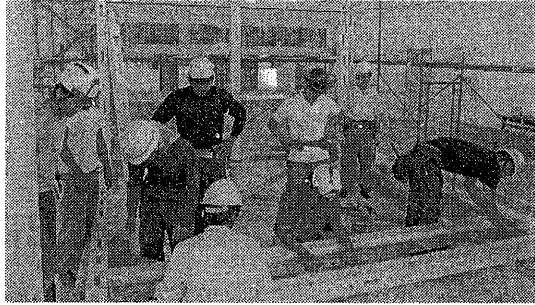
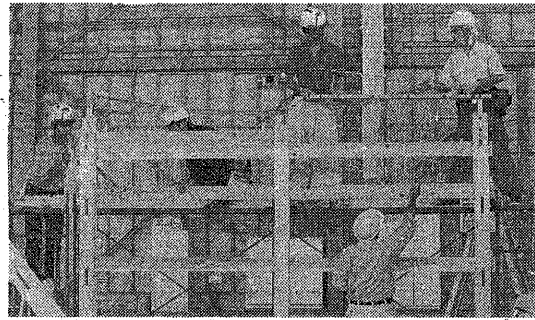


伝統構法の建て方実習 金具使わず木組で剛性

信州職人学校



「数字・いろは」の表示を確認しながら建て方に取り組む訓練生

県建設労働組合連合会（林衛執行委員長）は、中堅大工を対象とした「信州職人学校・伝統大工コース」の木造施工実習の仕上げとなる「間伐材の家」建て方実習を10月12日、松本ふれあい技能センター実習棟で行った。訓練生たちは伝統構法の理解と技能習得を

目的に、延べ5日間の手刻みなどで加工したヒノキ小径木の柱梁、ヒノキ間伐材垂木、スギ間伐材貫などの部材を、金具を一切使わずに木材を仕口・継手の締め固めと楔（クサビ）・栓などで組み上げる建て方で「間伐材の家」の上棟に1日がかかりで取り組んだ。

建物はガレージなどが用途の平屋建て切妻屋根、間口3・3m（2間弱）、奥行4・5m（2間半）の規模。入口開口部は合成柱・梁などで、壁面は貫の桁固め、足固めで剛性を出す構造。金具を使わず組み上げているので、完成後に当日再び組み外し実習棟から搬出した。

同講義は、県建設労働が伝統建築技能を次世代へ継承するため2009年から開講のコースで6月から11月までの毎週土曜日、半年間の訓練を実施している。今年は10人が受講し11月9日の修了式を経て県知事認定の技能評価試験を受験し、合格者には「信州伝統大工」の称号が与えられる。